

---

# おしえて。 ~Case:Winter

MMR

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おしえて。～Case・Winter～

### 【Zマーク】

Z6903F

### 【作者名】

MMR

### 【あらすじ】

××を、おしえて。想いや考えが人それぞれなように、相手にして欲しいことも違うもの。そんな気持ちを女性視点にて、超短編の一話読切連載（一話あたり2000弱～3500字ほど）で、全11編お届けします。

## Teach・1 キスを、おしえて。

私は、まだ付き合いたてのカレシがいる。

「あのっ…私とこれからいっぴい、一緒にいてください！」

ほおをなでる風がちょっとぴり冷たいキャンバスの秋空の下、精一  
杯にぶつけた想い。

今思うと、変なコクハクだつたけど。

カレは私の言葉を聞いて、にこりと笑つて「いいよ」と言ひてく  
れた。

「今日はどこに行こうか。どうする？」

今日も私に、カレはあの時と同じほほえみをくれる。

あれから1ヶ月、これまでただの知り合いだつた私たちは、休  
みになればお互いに行きたいところを言い合つてデートをするよう  
になった。

いつの間にかその行きたいところはカレと私が交互に考えるよう  
になつていて、今回は私の番。

暗黙のルール、つて感じなのかな？それも、気持ちが通じ合つて  
いるようで嬉しかった。

「えっと…まずは服見に行くでしょ、あ、あとお弁当持つてきたん  
だよ、一緒に食べよ。その後公園に行つて散歩しよ」  
お互にお金はあまりないから、結局行きたいところとこつても  
大して変わらなかつたり。

そんな、いつもどおりの2人の時間。

だけど今日は、何かが違つているような…そんな気がした。

「ん…わかつた、そうしようか」

その原因はすぐにわかつた。カレの視線が私を向いていないよう  
な、どこか遠くに気持ちを置いてきているような、とにかく普段と  
は違つた表情をしている。

「どうしたの？なんか様子が変…」

「え！いや、そんなことないよ、いつも通りだよいつも通り」

「そうかなあ、今日、私に向かって話、してくれないよね？」

「そ、そう？気のせいだよ」

カレはそう言いながら、どう考へてもムリヤリに、私に視線を向けてくる。

その向け方があまりにストレートだったので、私の顔が少しづつ熱くなつてくるのを感じていたけど、お構いなしにカレは私から視線を外そとしない。

「だ、だからと言つてじつと見な」の一ほら行くよ…」

耐え切れなくて、矛盾していること言つてるなあと思いつつ、私はカレの前を早足で進む。

いつたい、カレは何を考えているの？

そんな、嫌な不安を抱きながら。

「ふー、今日も楽しかったね」

夕日が沈みかける時間の公園のベンチ。

日の落ちるのが早いのか、それとも時間の経つのが早いと思っているからなのか…今日はデートのはじまりから不安はあつたけど、やつぱりカレといるのは楽しくて。

「そう…だね」

でも、今になつて同じ不安がよぎる。

ぽつりとつぶやいたカレの顔を、気付かれない程度に軽く覗き込んでみる。

秋の夕日が斜めに入つて、影を落としている。その表情に切なさを感じた。

私の思つ、嫌な予感。それは、私を好きではなくなつてしまつたかもといつこと。

一度そう考へてしまつと、カレの行動、様子、表情…全てに説明がついてしまう気がして、だから怖くて、あまり考へないようになつた。

ていた。

だけどそのことを意識しそぎて他の話が浮かばない私は、覚悟を決めて切り出した。

「やつぱりちよつと変だよ、今日。何か…あつたの？」

最後まで言い切る時に、少し言葉がよどんだ。

少しだけ起こった沈黙が心を締め付ける。夜に向かっていくこの時間は確かに寒いけど、それ以上に体が急激に冷たくなっていく。私がなんとか話をつなごうと、何も考えていないのに口を開こうとした時だった。

「聞いてもらいたいことがある」

それまでベンチに座つてから前だけしか見ていなかつたカレが、私の方に向かう。

今までに見たことのない、真剣そのものといつた表情が感じ取れた。

たぶん…ううん絶対、これは大事な話。

嫌な予感を一日中ずっと感じてきた私。だけどもう逃げられなくて、そのまま受け止めるしかなかつた。

「な、なに？」

「今まで、何回か一緒に出かけるようになつて思つたんだけど…」

「うん、楽しいよ私」

聞いてもいないことを答える私。少しどもひき止めようと思つて。

「そう、自分も楽しいと思つてる。だから」

「だか…ら？」

カレがよりいっそくに私の顔を見てくる。まるで吸い込まれそうなくらいに。

あ、来る…私は、その続きを覚悟して待つた。

「付き合つて、欲しいんだ」

「…え？」

それは予測してなかつた言葉。

頭が考えることを受け付けなくなる。言つてゐる意味がよく分か

らなかつた。

ただ、普通に聞いてこれは私に対する「クハクにしか思えなかつた。

「ど、どうこう」と? だつて、私は既にもう想いを伝えてるはずだけど…

「…え?」

今度は、カレの方が予測してなかつたといった感じで聞き直していく。

「だつて、あの時…」

私が想いを伝えた1ヶ月前のことを、カレに話す。すると  
「あ、あれが告白だつてこと? てつきり、一緒にいて欲しいつて友達になることかと」

あまりにかけ離れていた私とカレの気持ちに、気が抜けてしまつ。自分でも変な想いの伝え方だつたとは思つていたけど、まさか、その意味を間違えられていたなんて…

「これまでの1ヶ月はなんだつたと思つてるの?」

おまけに、いらぬ嫌な心配までしてしまつたのに。

「い、ごめん…」

「責任、取つてもらうからね

「え…何をするつもり…」

「こう、するの!」

その時のカレのびっくりした顔は、きっとずっと忘れない。

びっくりするのも当然だよ。だつて、カレに唇を寄せたのだから。

今度こそ、間違えられないように。友達だなんて言わせないよう

に。

そんな確認のようなキス。それくらいはさせてよね。

でも、これじゃまだ一方的。  
だから、今度は私に。

キスを、おしえて。

## Teach・2 むくもつを、おじえ。

「うー、むー…」

お布団のぬくもりが、すく心地良い。

突然寒くなつたなあ、と起きているのか寝ているのか分からない  
よつなまどりみの中でうすらと考へたりする。

「でも、時間だもんなあ…」

起きる時のいつものわたしのヒトコマ。毎日毎のこと、起き  
られないから。

「んー、眠い…」

12月になつて寒い日が続くけど、それを超えるくらい眠気が強  
くて。

やつぱり、朝のまどりみが少し足りなかつたみたい。

「ボケボケしてんな、相変わらず」

そんな頭がはつきりしていないうわわたしの耳に、イヤミな声が通つ  
た。

そこには、なぜか小学生の時から高校生の今までずっと付  
き合ごのある、幼なじみといつより悪友のような存在のアイツ。  
わたしの弱いところをとことん突いてきて、わたしを困らせる嫌  
なヤツ。

「仕方ないでしょ、冬で寒いから起きられないんだもん」

「なに言つてんだ…夏は暑さでボケボケしてるくせに」

「うー…いいじゃない、女の子らしくてカワイイでしょ？」

アイツは何も言わないでわたしを見てきたかと思うと、首を振り  
ながらわざとひじへため息としか感じられない息の吐き方をしつつ、  
足を進める。

「な、何か言こなさいよ…」

言つたわたしの方が恥ずかしい。

きつとこういう風に女の子の扱い方を心得てないから、彼女のいつもできないんだよ。

わたしがそう心の中でつぶやいた…つもりが、少し声に出てしまつたらしく。

「…何か余計なこと言わなかつたか?」

「別にー。朝からわたしが構つてあげているくらいだから、よっぽど相手する人がいないんだなーって」

「何バカなこと言つてるんだか…ほら、行くぞ」「涼しい顔して、よく言つよ。

そんな冷静な対処をされると余裕を見せられているよひよで嫌な感じ。

そう言いながらも、置いていかれそつになるので駆け足でついていくわたし。

結局わたしがどう思おつが、いつも何をするにも、アイツ主導になつてしまつ。

少し考えればついていく必要はないはずなのに、流されるよひよで行つてしまつ。

そんなわたし自身の行動も、よくわからなかつた。

「バカなことつて何よ、彼女くらい作つたらどうなの?」

アイツのちよつと後ろを、追いかけるようについていくわたし。あまりにもわたしが置いていかれて、打ち負かされているままで終わりたくなかったので、せめて口だけでも追いついてみる。

「そんなに彼女を作つて欲しいと思ってるのか?」

「当たり前じやないの、毎日楽しくなるでしょ?わたしがつるんであげなきやいけない時間も減るし」

「…じゃあ、どうすればいいのかおしえてくれよ」

アイツの歩く足が突然止まつたので、後ろを歩いていたわたしはその背中にぶつかつた。

と思つたのが一瞬。だけど、違つてことにすぐ気付いた。

「何で急に振り向いて止まるの、鼻ぶつけた…」

背中だと思っていたわたしは、それだけ言つのに精一杯だった。突然のこととはいえ胸に飛び込む形になつたなんて、『まかしたくて。

アイツの背丈は改めて見ると、当たり前だけわたしが見上げなければならぬくらいに大きい。

それを意識してしまうと、すこく不覚なことだけど、わたしの顔が勝手に熱くなつていく。

「彼女なんていふことないからな。どうせなら練習に付き合ってくれよ」

「何勝手なこと言つてるのよーわたしの気持ちを考えないで言つてるの？」

「…じゃあ、こいつの気持ちも考えて欲しいもんだ」  
わたしが何も言えなくなつたことをいいことに…

包み込まれるように、わたしの体が簡単にアイツの胸におさまってしまう。

するいよ。これじゃ、わたしが手のひらで遊ばれてるみたい。  
なんでホント、わたしの弱いところをいつもいつも突いてくるの?  
どうしていつも、アイツに主導権を握られなきやいけないの?  
でも、この暖かさはいつまでも感じていきたい…と思つてしまつ。  
それは、朝のまどろみの続きをはじめるよ。

だから、このままいつしても。そしてお布団の中なんか超えるくらいの。

あなたのぬくもりを、おしえて。

## Teach・3 恋のテクニックを、おしえて。

私の恋のテクニック。

男と目が合つたらちょっとだけ気付いたふりをした後、慌てるふりしてそらすのはあたりまえ。

いつも口元は上げて、にこにことしてこる」と。

もちろん、鏡を見てその練習だつてする。

それだけではなく、他にもイロイロ。そんな私の努力はいつしか周りの女の子たちにも知れ渡つて、時にはどうすれば振り向いてくれるのか、そのコツを聞かれたりもする。

私がそのテクニックを普段から使つてることで、男たちは私に告白をしてくるようになつっていたのだけど…私は全て断つていた。だから女の子の間とは打つて変わつて、男たちの間では心をもてあそぶ悪魔のような女だというウワサが私本人にも届いていた。「はあ…こんなつもりじゃなかつたんだけどな」

そう。私は別に、もてあそぼうとなんて思つていなかつたのに。

いや、結果的にはそうなつてしまつたのかもしれないけど…

「おい、ずいぶん悪いウワサがたつてゐみたいだぞ…また誰かフフたのか」

私にかかる、その声。

そう、元はといえばコイツがその元凶よ。

「知らない…勝手に仕立て上げてるだけでしょ。『シップ好きだもん、みんな』

「それは言つてもな。毎回ターゲット変えて色々つかつて…いくら

なんでも雰囲氣で気付くつての」

だけどこうして何も私に傾いてくれないと、本当に何をやつてるんだかわからなくなつてしまつ。

そう、私はこの男が好き。

高校の時から一緒にいてその時から好きだったけれど、ずっと言えない今までいて、一緒に大学を目指すと決めた時には、

『大学に入つたら、テクニックをみがいて振り向いてもらつんだ!』って張り切つて、いざ同じ大学に入れたのはいいものの、勉強して実践したテクニックはことじとくこの男には通じなかつた。

「何やつてんだ、気持ち悪い」

そんなことを言われ続けた。

私は悔しくなつて、こうなつたら何が何でも意識してもらおうとして、なりふり構わず周りの男に気を持たせるようなことばかりして。

それで結果的には周りにカン違いさせているわけだけど…

でも、そこまでもこの男といつたら嫉妬してくれるわけでもなく、慌てることもなく、あくまで友達としての付き合いしかしてくれなかつた。

だいたい、高校の時に同じ大学を目指すつて私が宣言していくつてきているのに、私が好きになつていることを気付いていないの?

…それとも、私に気がないの?

もう本当に、誰かおしえて。

「気がないんだったらそつこいつのは止めた方がいいぞ。敵を増やすだけだ」

心配より、私のことをちゃんと見て欲しい。

そんなことは、今となつては直接言えなかつた。

「じゃああんたはどうなのよ。なびかなかつたじゃない」

そう、そのターゲットの1人目なのよ。

「バカか、そんなことされてなびくほどオレは軽くない

「そう…なの…」

私の今までの努力が全て否定されているようにしか聞こえなくて、声があまり張れなくなる。

「ただな、ドキッとはする。おまえがそんなことをするとは思わな

かつたからな

「フォローしなくていいわよ…どうせ気持ち悪かつたんでしょう？」

「そりやまあ、そうだ」

私から質問したとはいえ、はっきり返されるとかなりダメージが大きい。

心臓に針が刺さった気分というのには「ひこう」と言つんだらうな、と思えた。

「高校の時くらいの何も考えずにオレと一緒に大学に行く!なんて言つてたおまえが…その、好きだからな」

「えつ…」

雰囲気が突然打つて変わるそれは、あまりにも突然の展開。全身すみずみまでが、鼓動を打つような感覚。体が急激に熱くなる。

私が視線を向けると、彼はそむける。

「ま、何も考えずに目先のテクニックを使いまくるっていうのはおまえらしいわ。どうせやるんだつたらオレだけにしどけ」「な、何言つてんのよ、それを言つならもつと早く…」

熱い気持ちが、目にあふれた。

「悔しい気持ちばかりさせて…もう知らないんだから…」「はいはい」

冷静に抱きかかえてくるコイツの胸の中はあたたかくて、優しい。なんなの?最後には私のテクニックじゃなくて、「コイツのテクニックにはまつてしまっているの?」

そう考へると、余計に悔しくなる。

私は知識におぼれて、私らしさを見失つていた。でも、ありのままの自分を見てくれる人がいる。

そんな人が私の好きな人で良かつたと、自信を持つて今は答えられる。

でも、やっぱりこのままじゃ終われないから。

あなたに負けないくらい、もっと自分を磨いてやるんだから。  
もちろん、それを見せるのは『マイツ』だけ。  
だから、これからは『マイツ』のためだけの。

本日の恋のテクニックを、おしえて。

## Teach・4 ドキドキを、おしゃべり。

「いいお天気だなー」

海をそのままひっくり返したかのようなくもりのない青空の下で、私は一人、噴水の前である人を待つている。

その相手は、ずっと私が想いを寄せてきた人。

どれくらいずっとだつたのか、もう忘れてしまったくらいだからでも今、その人を待てるということは、どんなに幸せなことなのだろう。

じつして待つている間でも、既に胸のドキドキがおさえきれないさそうになっている。

自分の心でさえもコントロールできなくなるほどに、じつじょつもなくなってしまっている。

じついう時は、どういうことを考えたらいいんだろう。  
少しでも、緊張をおさえなきや。

それは、とても急いでいた日。

あまりに寒くて、もう少しだけとふとんをかぶつたのがいけなくて、今その分を取り戻さなければいけなくなってしまって。

学校に遅刻しないための電車の時間ギリギリになってしまっていた。

本当はもう一本遅い時間でも間に合わないわけではないのだけど、私の歩くスピードではかなり厳しいし、何より時間ちょうどだから道がすゞぐ混んでしまって、思つよつに歩けない。

だから、私の間に合う時間は普通の人よりも一本前。それなら駅までの道のりは特に混んでいるということはないから、私ががんばれる場所は家から最寄りの駅までのこの部分しかなかつた。

「間に合つ、かな…」

左手の手のひらを自分に向かへ、時計を確認する。

「あ…」

すでに、その電車が出発する時間だった。

いつも乗つている電車もけつこう混んでるけど、やっぱりギリギリの時間はますます混んでる。

人の動きに身をまかせないといけないほど。

「おっ、どうした。珍しいな、このタイミングで会うなんて」  
私がつり革の下の部分によく手をかけるようにして流れされないようにバランスをとっていると、横から聞き慣れた声がした。

それは、私とクラスが一緒の人。

「あ、お、おはよ…」

だけどそれ以上の気持ちがある私は、かなり心が揺さぶられた。  
それはもう、心臓が飛び出てそのまま落ちてしまふんじゃないかな  
つてくらいに。

「ま、おおかた寝坊したってことだらうな。そうじやなきやわざわざ混雑するこの電車に乗るわけないしな、うん。おれはなんともないからこの電車でいいけどな」

勝手に言つて納得しているけれど、本当にことだから何も言えない。

ただ、最後の一言に対しても彼も単なる寝坊なんだらうと、頭の上の髪のハネ方で思つた。

「…何がおかしいんだよ」

私はそのことを思つて笑つてしまつていたみたいで、私のひたいに指ではじかれる軽い衝撃が走つた。

「いつたあ…もう、こんな狭いところでやめてよ」

私の特別な想いとは逆に、彼はどうも私のことをおもちやか何かとカン違いしている感じがある。

私たちは、普通の友達。そんなスタンスでの付き合つた。

電車を降りて、学校までの通り道。

さつきも思つてはいた通り、この電車では早く歩かなきゃいけない上に人をすり抜けていかなくちゃいけない。

「何やつてんだよ、早く行くぞ」

すでに少し先に彼がいる。いつの間に、と思つたけビビリも私が遅いみたいだ。

それでも人の流れがうまく読めなくて進めない。すると彼は私のところまで戻ってきたかと思うと、

「まじまじしてんなよ、行くぞ」

そう言つて私の腕をつかんで歩き出す。

「え…えつ？」

私は心の整理もつかないままに、引きずられるように、つまづきそうになりながら、彼の後ろ姿をずっと追つていく。

その背中はなんだか頼もしくて、大きくて。辺りの雑踏は私の耳には入らず、ひたすら顔も見えないのに見続けていた。

…ドキドキを、おしえて。

私たちは、遅れることなく教室に入ることができた。

「なるほどな、いつもあの電車に乗つていらないワケが分かつたわ…」

彼は私のとなりで机にべつたりと体をくつつけて突つ伏している。

「べつに…連れてつて欲しいとか頼んでいないけど…」

「な…たまたま気が向いて親切心で連れてつてやつたつていうのこそんな言い方あるか」

つかまれていた腕をさすつてみる。もう腕は離されているというのに、なんだかまだ熱く感じた。

「急に腕をつかんで連れ去るうとしたり、ひたいをキズモノにしたのが親切心なの？」

「おい…その言い方確実に誤解を生むからやめてくれ」

突つ伏していた体を起こして焦つているように見える彼に、私はさつきの頬もしさとのギャップを感じて、おかしくて仕方なかつた。

だから、こんなことも冗談っぽく言えたのかな。

「誤解を解きたかったらこれからも今日と同じ電車で遅刻しないよう連れて行つてよ。その分寝坊できるんだから」

考えてみれば、かなり強引なことを言つたと思つ。

「本当に待つてるのかよ…」

彼が私の前にやつてくる。

そう…私はまだ、彼に何も気持ちを伝えていない。

強引なことをあの時には言つたけど、それはまだはじまりにしか過ぎないわけで。

きつとその時は彼といえば、必ずやつてくる。いつもして彼と一緒にいる時間が続くかぎり。

だから、その時は。

むつとジキドキを、おじえで。

## Teach・5 クリスマスを、おしえて。

街に流れる、毎年おなじみのクリスマスソング。相変わらず気が早くて1ヶ月も前から流れていったけれど、時間はどんどん追いついて、気がついてみれば今日はクリスマスイブの3日前。

あえてカウントダウンする理由も意味もないけれど、どこか意識してしまうのは、私に彼氏がないからなのかな。

「去年のクリスマスは、楽しかったなー」

ふと、つぶやきながらその時のこと思い出す。男女問わずに誘い合わせた人たちで集まつて、話をたくさんして…

その途中で、ある女の子に『恋なんて絶対しないんだからねー』って、恋することを否定するようなことを言われた時に困った覚えがある。

だつて、友達が連れてきた人の中に私の好きな人がいたのだから。誰にも、言ったこともなかつたのに。

いつも遠目で見ているだけで、声をかけることができなかつた人。でもその日から、の人とは会うと言葉を交わすようになつたし、時には話し込むこともあつた。その時のメンバー数人で集まつて、デート気分を味わつたりもした。

…それでも、距離は相変わらずだけど。

なんだか、今までのことを振り返るだけでも顔が熱くなつてきてしまう。

「それにしても…そもそもなんで私、ここを歩いてるかなあ

人の多いファッショント街。またクリスマスにみんなで会うだろうから、服くらい準備しどけば?と去年のクリスマスにみんなで会うだらうメンバーの一人に言われて出かけてみたものの、特に欲しいと思うものはないし、カップルだけで居心地が悪い。

「ま、いいか。少しづらつ…」

そうして歩き始めようとした矢先のことだった。

あまりにも偶然？それとも必然？

あの人、前から歩いてくる。

「あ…」

私が声を漏らすのと同時に、あの人と目が合った。

「偶然だね、ここで会うなんて」

人を通しての付き合いや、会うと分かっている場所…例えば大学のキャンパス内とかだと数え切れぬほど会っているけど、街角で心構えもなしに突然会ってしまうと、なんとなく恥ずかしかった。それが表情に出で相手に嫌な印象だけは「えたくなくて、表面的にだけでも冷静にあいさつしなきゃ。

…というつもりであいさつしたけど、できるかな。

「そうだな、けっここう久しぶりに会う気とするよ」

どうやら、あまり心配しなくても良さそう。ちよつとほつとした。

「今日はどうしたの？」

「いや、もう3日後がクリスマスだろ？服でも用意した方がいいんじゃないのかって言われて」

「そうなんだ。私も同じように言われたの、考へることは同じなんだね」

「そつか。どうせだから一緒にまとめて見て回りつか」

流れいくような話のベース。だからその言葉に何も考えずに「うん」と答えてしまった。

けれど、その後によく考へなくとも分かることが一つあった。

…これって、デートじゃないの？

それからどれだけの時間が経つただろう。

それほどまでに時間を意識しようとする気持ちが向かないほど短い時間だった。

ただ、こんなにゆっくりと2人だけの時間を過ごしたことは今までになかった。

服を買う以外にも休憩に喫茶店に入ったり、ソフトクリームを買って食べたり。

冬に買うソフトクリームはさすがに冷たかったけど、顔がずっとほてっていたせいか、ちょうどよく冷ましてくれた。自分ででも気持ち悪く感じるくらいに、良い雰囲気になつていていた。

がした。

だけど、日の沈むのもこの時期では早くて…

「そろそろ帰ろうか」

あの人の口からでるその言葉が切なく響いた。

「…うん、そうしようか」

本当は、もつと一緒にいたいけど。

そんな考えをめぐらせる。こんなに楽しい時間が、簡単に壊れてしまうような気持ちを感じた。

…だから、やつぱり引き止めなきゃ。それにこのまま終わって帰っちゃつたら、今度いつチャンスがあるか分からぬ。

「あのつ…！」

私が言葉を続けようとする。と、同時にさえぎる電子音があつた。それは、ケータイのメールの着信音。

そのまま話を言い切つてしまつてもよかつたかもしれないけれど、あまりにも間が悪くて仕方なく話をそらした。

「…ごめん、メールが来たみたい」

すると、あの人もケータイを取り出しあげた。

「オレもだ」

2人で、それぞれメールの内容を見る。

『やつほー どう、会えた？なかなか行動に出ないから、ちょっと出会えるようにしかけてみたよ。うまくいった力ナ？』

ご丁寧にも、そのメールは同時に数人に送る時にそれぞれ誰に送られているのか分からぬようにするBCCでやつてきたけど。

少なくとも他の一人の送り先は、同じタイミングでメールを見ている…

「…あいつらにしてやられたか」

吹き出した顔につられて、私もほおがゆるむ。

そうだ、同じ内容のメールが届いたということは。

「同時送信するなんて、会えてたらBCJにしても意味ないのにね」

「またたくだ。何考えてんだか…」

「返信しようか、会えたつて」

私はケータイをカメラモードにして、インカメラをかける。液晶画面に映る、2人の顔。

その距離が遠すぎて、どぎれていた。  
だから私は思い切つて。

「えいっ！」

ピースサインをしながら、カレの肩に顔を密着させる。  
とまどうカレの顔を画面に見たけど、そのままボタンを押した。

…もう、カレって呼んでもいいんだよね？

そんな意味もこめながら、私はカレの目を見る。

「ん、いいんじゃない？」

カレのやわらかい笑顔が嬉しい。

私もじつと見つめることができることに幸せを感じながら、返事  
のメールを書いて送信した。

「おどろくかな？」

「予想通りと思つてそういうだけどな」

辺りは真っ暗になり、2人きりでいられる束の間の時間。  
でも、今日一日の中で一番満たされる時間。

「…じゃあ、続きは3日後にでも」

「え…」

一緒にいたいという私の想いがつづぬけていくような気がして、  
恥ずかしい。

でも、それも心地よかつた。

いったい、3日後をカレと過ごしたら、どうなるんだろう？

そんな、期待しちゃつてもいいぐらいの。

ステキなクリスマスを、おしえて。

「…ん？」

私たちの寄り添う写真を送信したメールの返信があった。

『うんうん、1年前のクリスマスの時、気になつてそうだから呼んだのは正解だつたね』

「ええっ！」

同じタイミングでカレまで驚く。

今のメールを確認すると、またもBCC。と、いうことは…

「まさか、1年前からじしてやられてたのか」  
私の様子も見て、カレがつぶやく。  
相手の方が一枚上手みたいたった。

## Teach・6 恋のはじまりを、おしえて。

お正月の街並み。

確かに私が小さかつた頃は店なんかやつていなかつたはずなのに、今なんてまるで普通の休日…いや、それ以上に大型連休中のようなにぎわいを見せている。

親子連れは普通にいるとしても、同じくらうにカップルもちらほら。

「何を正月からイチャイチャしてゐるのかねえ…」

恋だの愛だの言つているのがバカバカしくて仕方がない。恋をすると成長するなんていうのも、信じられない。

ついこの前のクリスマスだって、その更に1年前の同じ日に集まつていたうちの2人がくつついて仲良くなつてデートするなんていうから、集まりに来なかつたりするし。

まったく、どうりで『恋なんて絶対しないんだからねー?』とからんだ時、反応が薄かつたわけだわ。

あ、一応ことわつておくと、別にモテないからひがんでいるというわけでもない。

告白されたこともあるし、街中で声をかけられたこともある。

…つて、誰に言つてるんだか。

「1人でさびしそうだねえ、お兄さんが付き合つてあげましようか?」

私が1人ツツ「口ミみたいなことをしていろうぢこもこれだ。

「いりませんっ…つて、あれつ」

「よつ」

そこにいたのは、そのちょっと前のクリスマスの集まりにいた男。

1年前の時にもいて、なんとなく気が合つて友達としての付き合いを続けている人だつた。

そんな男が、手をあげて何の悪びれもなくあこせつしてきた。

「なんというベタな登場をしてくるのよ、アンタは」「正月に1人でカワイイ子が歩いてりや、声かけないわけにはいかないよ」

「何調子いい」と言つてんだか…

「と、いうわけで。今日は付き合つてくれ

「何が『というわけで』なんだか…」

ツツ「ハリをする氣も起きず、同じよつた言葉の返し方で対応する。

「このまま帰つたって、お互ひマなだけだろ?」

「私は私で好きにするから、つこしてくるなら『勝手に』

関わると面倒そだつたので突き放したつもりだったのに、どう

やら彼は肯定の言葉ととらえたらしい。

「わかった、それでいい。ついていく」

なんてポジティブなモノの考え方をするんだひつ、と思いつつ、

言つてしまつた以上は仕方がないので何も反論できない。

そう、じゃあ勝手にすればいいじゃない。

心の中でつぶやいて、私は何も言わずに歩き出した。

私のちょっと後ろを、彼が歩く。

普通は逆なはずの光景だらう、周囲の好奇な視線を氣のせいかも  
しれないけど感じる。

それとも、彼のことを意識している…?

立ち止まり、振り返つて彼の方を見てみる。

「どうした? ようやく人と話せる気になつてくれたか?」

…やつぱり、それも氣のせいかもしれない。

「ずいぶんと時間が経つけど、よくもまあそこまでヒマじでるわね」

「それ、自分が言えるセリフだと思つてる?」

「そりやそただけど。私にかまつてゐるより、もつと有意義な時間の  
使い方もあるでしょ?」「元に

彼は一瞬黙つたけれど、それは言い負かされたといった感じではなく、大きく息を吸つて何かを整えようとしているだけのようになつて見

えた。

「いいや、間違いなく有意義な時間だと断言する」

「簡単に言い切ってくれるのね。どこが有意義なのよ、後ろにくつ

ついてきてるだけじゃないの」

「後ろにくつついてきてるだけ、ね…そつとじか見てないのか」

「それ以外に何かあるはずないでしょ」

「いや、あるぞ」

「さつきから話が一向に進まない。理由を言わないと、ずっとループしそうな気がする。」

「根拠を言ひなさいよ、納得する理由だつたら普通に付き合つてあげるわ」

「本当だな？」

「変なところで確認するのね…大丈夫よ」

「後ろにくつついてきてたのを横に置いてあげるくらいのことだつていうのが、そんなに重要なことは思えないけど。」

「じゃあ納得する理由を言ひてやる」

「何もつたいぶつてんのよ、さつきから。早く言ひなさいよ」

「なんというか、だな。お前が一人で歩いてたら男に声をかけられる可能性があるだろ?」

「は? いきなり何の話を…そもそも声かけられてもついていかないわよ」

「多少強引にでも連れてかれるかもしれないぞ」

「話をそらそうとしてもムダよ」

「先にクギをさしておかないと本当に無限ループが始まリそうで、それは時間のムダでしかない。」

「いや、話はそれでないぞ。誰かに言ひ寄られる可能性はなるべく少なくしておきたい」

「何を言つてるの? それがなんだって…」

「ずいぶん二ブいんだな、誰かに持つてかれるくらいだったら自分が持つてくつて、そういう話だ」

「なつ……。」

言葉に詰まつた。何かを整えようとしていたのほどのためだつたの？

それにしてもワソクシツシヲハセえ置かず、表情も変えずに簡単に言われてる気がする。

というか、こんなに回つくづく言われるなんて…

「ああ、納得する理由を言つたら？これで『付き合つて』くれるんだよな？」

「バカあー！『付き合つて』の意味カン違にするなつー！」

まったく、多少強引に連れてこいつとしてるのはどっちの話なのよ。だけど、彼のペースに既にはまつてしまつてしている私もいる。きつとこれからも、そういう関係が続くのかもしれない。恋をして成長する、なんて今は言えないけれど、でも今思つなんとも言えないこの気持ち…胸がふるえるような感覚は、不思議と悪くはない。

「こんな気持せせられてことひとせ、たぶん、私は…  
だから。

恋のはじまりを、おしえて。

わたしとあなたは、もう3年の付き合いになる。  
付き合いといつても、友達としてじゃない。お互いに想い合ひ  
とができたあの日。

「好きだよ」

あなたがそう言ってくれた日から。

あなたのことはよく知ってる。緊張した時には言葉が少なくなつ  
て、大事なことを言ひ時は必ずシンプルなものになるの。  
でも言葉なんて少しだけでいい。それまでの友達としての付き合  
いの全てが、この一言に詰め込められているのが伝わった。  
だからその時は、わたしもつられて一言だけ。

「うん、私も好き」

たった一言だけ言い合つただけなのに、なんだか照れくさくなつ  
てしまつたりして。

とてもあなたの顔を見ることさえできなくて、いつむいたりして  
いた。

わたしとあなたの付き合いは3年と言つたけれど、今はちょうど  
どその想い合うことができた日。

お互いに仕事が忙しくてなかなか会えなかつたけど、なんとか都  
合をつけて夜のデート。

ただあなたと今日会つことになつた時に『記念だから』といった  
言葉は入れていらない。あなたの言葉にも入つていない。

忘れているわけではなくて、言わないだけ。わたしたちの暗黙の  
ルールだった。

「寒いね」

港の見える公園の欄干に2人寄り添つて、わたしは息を大きく吐

く。

白い結晶がわたしの視界を覆つ。あなたの息と交じり合つて、港から輝く光がダイヤモンドが反射するよつなかみのよつに見えた。

「ああ」

腰に手を回されたかと思うと、わたしはあなたの体に吸い寄せられるように引っ張られる。

本当は密着している側しかあたたかみは感じないはずなのに、心からあたたまるようで。

「しばらくこうしていたいね」

「そうだな」

あなたの言葉はわたしの返事ばかり。だけど、それがあなたの最大の優しさだと知っているから。

わたしは抵抗することもなくあなたの腕に頭をくっつけた。

そのままわたしもあなたも何も言わずに、ただただ時間が過ぎていいくのを感じる。

決してこの時間はムダじゃない。あなたがそばにいるだけで心は落ち着くし、疲れも取れていく。

波の音が素敵なBGMに聞こえる。色々なものに包まれて、今のわたしはすごく幸せだと思えた。

「わたしたち、だいぶ長く付き合つてきたね」

思い返すと、たくさんの思い出がある。デートもたくさんしたし、ケンカもしたし。

「浮気の疑いを持たれた時は困つたけどな」

そう、わたしは一度あなたを疑つたことがあつたんだけ。

浮気のことは結局、ただの友達だった女の子が彼に何をプレゼントすればいいのか相談していただけという、やけにありがちなパターンだつたけど。

それでも焦つてしまつほど、あなたのことのが好きだつたから。

「「めんね」

「いや」

せりと、あなたの言葉の少なさで損するのせりといる。付  
を合つてこるわたしでせりも感つよつないと、誤解してしまつ  
とをあなたはしてしまつんだよね。

でも、もうあなたのことはけやんとわかつてこるつもり。せりと、  
これから先も。

だけどちょっと意地悪をしてみた。本当はわたしがそんなこと言  
うのは間違つてゐるのに。

「なんか、怒つてゐよつて見える」

「せうか？」

「あの時もけやんと謝つたのにそんな顔してた」

「どうしてほしいんだ」

「うーん…じゃあなんかひとつ、して欲しい」とあつたら言つて

「じゃあ」

少しくらこ悩むかと思つたら、あなたは何も躊躇せず。に。

「結婚しよう」

3年前と変わらないあなた。わたしたちには一番大切な言葉まで、  
シンプルな言葉で片付けてしまつ。

というか、今度ばかりは言葉がシンプルといつだけで済んでいいな  
いよ。なんでこんな突然なの。全然心構えなんてできていないのに。  
意地悪したつもりが、わたしの方が返り討ちにされてしまった。  
あなたにはかなわないな。

だけどこれで文句を言つほど、わたしがあなたのことを理解して  
いないと思つていたら大間違いなんだから。わたしはあなたに動搖  
を見せないように気をつけながら。

「うん、私も結婚したい」

たつた一言だけ言い合つわたしたち。あの時と同じ照れくたれを  
感じるけれど、今度はしっかりと向き合つ。

「これがゴールなのではなく、むしろスタートだと分かっているか

今まで恋するひとの幸せをいっぱい教わった。  
だから今度は。

愛する幸せを、おしえて。

## Teach ·8 よりいひを、おしえて。

「ふああ…眠い…」

私の思ひ、心の底からつまらないといつ負のエネルギー。それは私の意識と全く関係なく、大口を開くもとになる。

ここは、大学の講義室の中。だけど、今は講義を受けているわけではない。むしろ休憩時間で、ゆっくりしていい時間なはずなのだ。

さっきまで講義を受けていた人はほぼ全員、その席にはもういない。だいたいは他の人のところへおしゃべりをしに行ったり、講義室を出て誰かと電話したり…とにかく、何かと人との「ミミコニケーションを取りに行っている。

私は、それを批判するつもりはない。それはそれでうまく世渡りしていくべきと思う。だけど、だからといって私が同じ行動を取るというのはありえない。

一人が好きなのも去ることながら、人と関わることが苦痛だった。何かというと流行りに乗つかつたり、悪口にも似たゴシップ的な噂話とか…そういうことに関わるのが嫌なのだ。人の作ったものに大勢の人が流されて、一体何がしたいんだろうと思つ。

だから私は、いつも一人でいる。話しかけられれば適当に話を合わせるけれど、積極的に私からどうするということはなく…

「じゃん！」

そんなことを考えていた途中、それは突然のことだった。

真正面のテーブルの向こう側から、男の顔が出てきた。

さすがに驚いた。ほおづえについてどこを見るわけでもなく考え方をしていたところに、何かが目の前に飛び出してくれば、それこそ私の意識とは関係なく反応してしまう。

「ははは、驚いた驚いた」

腕を組んでテーブルに置き、顔を前に出してきたこの男は、どこ

か見覚えのあるものだつた。

「どちらさまだったかしら」

「なつ、オレのこと忘れられてるのか…ちょっとショックだな。高校3年の時一緒にクラスだったつていうのに」

「そりだつたかしら」

いつものように適度に話を合わせる。この男が高校で一緒にクラスだったということは分かつていたけれど、あまり関わりたくないつた。あくまで今は、という話なんだけど。

というのも今、この男は女をつかえひつかえしているという噂がある。

他にも最近では聞かなくなつたけれど、色田を遣つて告白をせつてはふつているという、男をもてあそんでいる噂のある女もいたつていう話だし、随分と軽い人がいる大学のようだ。もつとも、この男もそれに流されているだけなのかもしれない。

「まあ、それはともかくだな…いつも暇そうにしているけどいいのか？つまんなさそうな顔して」

「私の自由でしょ、そんなの。私は一人でいたいと思つてるんだけど」

「うん、知つてる

ことも簡単に言つてくれる。その言葉と正反対の行動をしているということを認めているのだ。

「そつちは暇じやなさそつだから私なんかに構つてないで違うところ行けば？」

「随分とオレは嫌われてるよーで」

「そんなことはないわ。私は気を遣つてあげてるのよ」

私はこうして一人でいることに慣れている。だから、いきなりこうして話を振られることにも慣れていない。

それに、理由はまだあるんだけど…

「気を遣う、ねえ…何に気を遣つてるとかはだいたい想像がつくが」

「分かつてゐならその狙つてる人のところに行きなさいよ」

今、私はどんな顔をしているんだろう。ちゃんと普段よりの顔をして話せているだろうか。とても心配だった。

「しかしあまえも噂好きだつたとはな」

でも、その心配以前に聞き捨てならないうことをその男は言つた。

「噂好きなんて、心外だわ」

「ああ、そうだと思つてたんだけどな。でも現にオレの噂を鵜呑みにしてるだろ？」

確かにその通りだつた。私自身でもこれは矛盾してることだと思つてはいる。でも、どうしても意識してしまつて…

「さつきはあくまで客観的な意見を言つただけよ」

「じゃあ、噂はウソだと思つてくれると」

「ウソつていうか…」

「じゃあ信じてるってことなのか？」

いつの間にか、なんだか迫力に押されている気がする。私の言葉に間髪入れずに返してくるからだつた。だから…

「…信じたくない、って思つてる」

今まで出そうとしていなかつた、私の本音がここで出でてしまった。

「オレも同意見だ」

そして、私との間に一時の緊張が走つた後…

「信じていて欲しくなかつた」

そつか…結局、私も同じだつたんだ。むしろ振り回されていたのは、私の方。

噂が本当でないと知つた今は、素直に気持ちを言ふれる気がする。

でも、それを打ち明けるのはまだ先の話。

噂に負けないくらいの関係を築いてからにしたい。

だからその日が来るまでは、今まで一人でいたぶん…

二人でいられるようにじぎを、おしえて。

## Teach・9 気持ちを、おしえて。

「あはは、お兄ちゃんはきっと彼女ができる」とになるんだらうな  
あ」

窓の外でこうこうと変わり流れしていく景色を見ながら、私は思つた言葉を口に出していた。

ほんの少しだつたけど、様子を見に来てよかつた。そんなことを思いながら。

お兄ちゃんとは離れて暮らすようになつてから3年近くになる。お父さんの転勤が決まった時、お兄ちゃんはタイミング悪く進学する高校が決まっていて、いい機会だからとそのままお兄ちゃんだけ残ることになつて…

それから一度もお兄ちゃんの暮らしどりを見たことがなかつたので、休みがちょうどできたこのチャンスを生かして、会いに来たといつわけ。で、今は再会も終わつて、その帰り。

「さきなり女人がお兄ちゃんの家に来るんだもんなあ」「とにかく妹としてみたら何が気になるかつて、女人の存在が特に気になるわけで。

「そんな人はいないよ」

なんてはぐらかしていたくせに、しつかり来られちゃつて。私が出てよつとした時のお兄ちゃんの顔といったら、冬だというのに今にも汗を噴き出しそうなものになるんだもん。その表情の分かりやすさが変わつていなくてほつとしたけどね。

そして今日、新幹線に乗り込む私を、お兄ちゃんはその女人の人と一緒に見送りに来てくれた。

遠くなつていく2人の姿を見て、凄く似合つていると思った。ただ、お兄ちゃんはその女人の気持ちを理解していないみたいで：あれは、私が端から見ていても分かるのに。なんで気付かないんだろう。

でも、お兄ちゃんも意識していないってわけじゃなさそうだし…  
だってそもそもその女の人が家に来た時、ドア越しなのに誰なのかも  
分かつたあたりが怪しくて仕方ない。

「あっ、もしかして」

一応、お兄ちゃんにばれないようにその女人にはエールは送つ  
ておいたけど…

「もしもーし？」

いつ通じ合えるのか、分かんないよね…お兄ちゃんの気持ちがど  
うなつているのかわかんないし。

「人を無視すんなあ！」

「ひやああつ！」

耳元で大きな声を出されたので跳ね返りの耳鳴りがこだました。  
さつきから何か呼びかける声が聞こえるとは思っていたけれど…

「まったく…ようやく気付いたのか」

まさか、その相手が私だつたなんて。

「え…ええつ？なんでこの電車に乗ってるの？」

そこにいたのは、私のクラスメイトの男子。といつより、幼なじ  
みと言つた方が早いのかもしれない。

いくらそれほどの関係とはいえ、さすがに地元から新幹線で移動  
しなければならない距離にいたりされると、驚く以外にない。

「偶然だ」

そんな一言で片付けられるわけがない。

「もしかして、ストーカー？」

「そんなわけあるか。むしろびつちがだ」

「何が言いたいのかな～？」

「別に何も」

そんな言い方されれば、誰だつて「別に何も」と思つわけないじ  
やない。

「さて、隣に座らせていただきますよつと」

「ストーカーさんを隣に置いておけるほど私の頭はおかしくなつて

ないはずだけどなあ」

「今日は例外だと頭にたたきこんでおいてくれ」

シーズンから考えて混んでいないと思つて自由席を選んだのは、本当に誰か乗つているのかなつてくらいに空いていたので間違つていなかつたと言える。だけどその代わり、誰であろうとこいつして横に座られるのもまた問題はないつて言える話になつてしまつわけで。

別に、嫌つてほどではないんだけど…

「で、何をしてきたんだ。わざわざこんな遠くまで」

何の前触れもなく、彼が切り込んでくる。こつものことだから仕方ないとは思つていいけど、私のことをちよつとは考えてほしことも思うんだけどな。

「お兄ちゃんに会つてきたんだよ。ナツヒナちゃんとしてたから安心しちやつた」

「そうか、そりゃ良かつた」

幼なじみといつくらいだから家も近く、家族での付き合いも多いので、彼も私のお兄ちゃんのことは知つてはいる。だから、一応教えておいてもいいかなと思つた。

「もつと部屋も汚く散らかつてゐるかな～つて思つてたけど意外にそうでもないんだよ」

「まあ、あの人はけつこつまじめな感じがするからな」「人付き合にもうまくいつてるみたい」

「なるほどね…さつきの彼女みたいな女性を見る限り、確かにそつかもな」

「うんうん…ん?」

危うく、今の言葉をそのまま流しちつになる。

「何でそれを知つてるの?」

「えつ、何が…うつ」

彼もそのことに気付いたみたいで、今更ながら口を押されたりなんかしている。

「女人の話なんて私はしていない、でしょ?それに、今偶然会つ

たはずなのにっこりの出来事を知つてゐて…

「悪かつた」

彼が何も抵抗することなく、あっさりと非を認めてきた。これまでのやりとりからすると、意外な風にも感じた。

「どうじつこと?」

「女の子一人で行かせるのが心配だから、見守つてくれとそつちの両親に言われたんだ。実は今までそれなりに頼まれてたりして」それはあまりにも突然の、なんだか怖ささえ感じる告白だった。これまでも一人で出かけることはよくあつたけれど、それにも、つまつ…

「や、やつぱり、ストーカー…」

「なわけあるか。そつちの両親公認だぞ」

その言い分も間違つてはいないかもしない。でもお父さんもお母さんも、何を考えているのとは思ひけど…

「な、なんでそんなの引き受けやつのーす」く時間の無駄でしょう!」

「…」  
「…」  
「…」まで明らかになつても、全然気付いてくれないんだな

彼の声がこれまでと違う小さく低いトーンに変わる。

そこには、どこか暖かくも思える何かの思いを感じた。

…そつか、そういうことなんだ。

お兄ちゃんのこと、私が悪く言う資格なんて無かつたんだ。  
あんなにあからさまに気持ちが見えるのに、なぜ気付かないのか  
つていうこと…

私自身が今まさに、お兄ちゃんと同じ立場になつていたのに。

「う、うん…」めん、今わかつた

思えば最近はお兄ちゃんのことばかりで、私は周りが見えていなかつたのもしれない。

すぐ近くに、私のことを見てくれていた人がいたといふのに。

これは私がちゃんと彼に 対してけじめをつけないとこなこと思つた。だから、更に言葉を続けようと私が口を開こうとする…と。

「わかつてくれたか、よつやく」

それよりも彼の言葉が先に私に届いていた。

そのまま、彼は…私の心の準備もできていないままで、先の言葉まで…

「幼なじみなんだから当然だつてことだな」

「へつ？」

あまりにも自分の思つたこととかけ離れたことを言わると、こんな声が出るものなんだ。

どうこうことなのか、一瞬わからなくなる。

今の流れ、どう考えてもハッピーホンドにつながるところだったんじゃないの？

だけど、これが彼の精一杯の照れ隠しだつたといふことを知るのは、もう少し先の話。

期待させといてこれはなにじゃない、と文句を言つのもその時の話。

やつぱり、気持ちを通じ合わせるのって難しいんだな。  
だからお兄ちゃんも頑張つてほしこと思える瞬間。

私は…やつだなあ、この先ゆっくりでもいい…少しずつでも。

気持ちを、おしえて。

## Teach・9 気持ちを、おしゃべり。（後書き）

連載中の「イロハ。」の方からサイドストーリー。「」はこの連動が好きだったりあるのです。

## Teach · 10 バレンタインを、おしゃべり。

「はあ、どうじょひつかな」

明日はバレンタインデー。私の前には何も手をつけていない板チョコと、道具たちが並んでいる。

決してチョコ作りが苦手といつわけではない。何が問題のかつて、どれくらい気合いを入れていくかということだ。

周りからはサバサバした性格だと言われる私。自分でも、女らしくないとこりがあると思つたりする。なにせ、男たちの中に入っている方がむしろ話が合つたりもするし…

だからこそ、チョコレートを作つて渡すなんぞギャップがどう映るのかと心配になる。あと、あまりにもあからさまに本気なものを作ると引かれるような気がしてしまつ。

どうしようか…時計の長針が1周するぐらいに考え込んだあげく、考えても仕方ないととりあえずとりかかつてみる。それはいいものの、迷いが出てしまったのか…

「なんだか、中途半端な出来になっちゃつたな」

今更新しく作り直す気力もなくて、それを結局持つていいくことになつてしまつた。

それが私が作った、たつた1包みだけのチョコレート。

「やが当たり前になると、腰が引けてしまつものなんだな…

こんなもどかしい気持ちは、なかなか味わうことがない。

何を今になつて女らしく振る舞おつとしているんだか…気持ち悪い

い。」

「うつこのはさつを渡してしまつのが一番なんだよね。そういう聞かせて、私はある男に声をかける。

「ねえ、ちょっといい?」

それが、私のターゲット。話していても何の違和感も無くて、と

にかく話題が合つて…

いつの間にか、それは氣になる存在になつていった。

まだ、それが世間で言つ恋つてものなのかはまだ分からないんだけど…

でもそのままもやもやして田々を過げ」していくよりも、まずはこうしてアクション起こしてみるのが一番だと想つてひつして準備をしてきたんだ。

「お、どうした。今田はずいぶん様子が違うな」

「えつ、そう見える?」

「なんか気合いみたいなオーラが見えるけど」

「まさか。そんなことないって」

今は否定するしかない。でも気合いが入つてることを既に見破られてじることに動搖している私がいる。

何氣無しに言つてゐるかもしけないけど、彼の言つことはけつこつ鋭くて困ることもしばしばある。なぜかつて、今の自分でもよく分からぬ彼への気持ちを悟られたりなんかしたら、これからどう接していくべきのかわからなくなりそうだ…

今日もできれば、悟られずにいきたい。でもこれから渡すものを考えれば、少しさは気付いてほしいという気持ちもある。  
いつたい私はどうしたいんだか…

自分自身でも処理できない複雑な気分に嫌になつたりして。

「そうだ、一つ渡したいものがあるんだつたわ」

言い訳をする方が先に出てしまつてなかなか本題に入れない私をよそに、彼はそう言つとカバンの中から指輪程度のサイズの箱を取り出して私に差し出した。

「えつ、これ…何?」

「まあ、開けてみなつて」

もはや私の目的は完全に脇に置かれてしまつた状況で、言われるがままに開けてみると…

「…えつと、これ、チョコレート?」

しかもかなり綺麗にまとまっている。ホワイトパウダーまで振りかけられていて、見た目にもおいしそうだと思えた。

「いわゆる逆チョコってやつだな。なんか突然流行った感じだし、どうせだから作ろうと思つて。こうこうの作るの好きなんだ。意外だろ」

本当に意外だった。初めて知ったことだった。

だけど、それはなあさり…

「う、うん、意外…」

自然と後ろに回した手に力がこもるのを感じる。

同じくらこの箱に包まれた、中身がほぼ一緒の…でもおれりく出来なんて雲泥の差がついていると思うもの。

「ところどきから手を後ろに回してくるけど何かあるのか」

「もしかしてチョコレートとか。はは、そんなことないか」

読まれてた。

その時には頭の中がよくわからなくなつていて…もうどうにでもなれと思つていたのかもしれない。

「そうよ、何か文句ある?」

なぜ怒りながら渡すことになつてしまつたんだろうと思いつつ、箱を乗せたままの手を前に差し出す。

「いや、文句なんか別にないけど」

「じゃあ受け取れば?言つとくけど出来は期待しないでよね」

自分自身でも余計なことを言つてこんな気がした。このままじゃ嫌われてしまいそうで。

彼は何も言わずに箱を受け取り、包みを開ける。

中身は変わるわけも無い、自分でも中途半端な出来のチョコレート。

形も整つてなくて、特に何か飾りをあしらつたわけでもなくて。

その中身を見た彼は、何も言わない。

「だから期待しないでよと言つたでしょ。何とでも言こなさこよ

「いや、なんかす」へ考えて作ったのが伝わってくるかな

「なつ…何よそれ」

「それともオレがそういう風に思いたいから、か？」

そう言いながら彼は一口、私の作ったチョコレートを舐める。

それはチョコレートの甘さで包まれた、恋の魔法。

「また作ってきてくれよな」

バレンタインを、おしえて。

## Last Teach 春のおとぎ話を、おじさん。

ずっと後を追っていた。

ずっと一緒に、ずっと誰よりも同じ時間を過ごしていったはずだった。

だけど、それも今日で終わってしまった。

センパイが、高校を卒業してしまつ…

「卒業、おめでとう」それこまか

「ああ、ありがとう」

どこか落ち着かなによつに、センパイは私と手を合図させてくれない。

その理由を、私は知っている。

「これから…返事を聞きたく行くんですよね」

「そうだな。緊張するけど…でも」

センパイはそこで一日間を置いたかと思つて、私の頭の上に温かい感触をもたらす。

それは、センパイの大きな手。

今の私が、してもらつて嬉しいこと…センパイもそれを知つているので、私をほめる時には必ずこうしてくれるようにになつていた。

だけど、今はその温かさが切なくも感じる。

「告白までこきつけられたのは君のおかげだから」

「うまくいくといいですね」

「ああ、まあ、そうだな」

でもなぜか、うまくいく」とを願うと反応が薄い。

聞くたびに、本当に私がしたことは正しかったのかと考えてしまふ。

私はセンパイの幸せを願つていたのに。自分の気持ちを押し殺してまで応援していたのに。

応援なんてしなくていい、とセンパイが言っていたことを思い出す。だから大きなお世話だったのかもしれないけど…

「じゃあ、行つてくるよ」

そう言つて、センパイは私に背を向ける。

その後ろ姿に、私は不安を感じた。

うまくいったとしても、センパイが変わってしまうなんてありえないとは思つてゐる。そういう人だということは知つてゐる。だけど、そう言い聞かせてみても、やつぱり言こようの無い不安だけが膨らんでいく。

それでも、私は引き止めなかつた。…違う、引き止めるような勇気がなかつたのかもしないと思つた。

「はい、いい報告待つてます…」

そのセンパイの背中に、私の思つてゐることとは正反対の言葉をかけながら。

それから私はどうしていただろう。

このままにしておきたくない、だけど何もできないとこつ身動きの取れない感じ…

じつとしていることができなくて、とにかく何も考えずに歩き回つていたのだらう。気がついてみると、近所ではかなり大きめの公園にたどりついていた。

真っ暗やみの中をぼつぼつと、この黒い世界に吸い込まれてしまいそうなほどに輝く光。それはまるで私の心中を映しているよう。だからなのか、あまり怖さを感じることなく公園の中に入つていた。

そこで見つけた、ある人影。

「あれは…」

センパイが告白した相手がいる。

そしてその隣には、違う男性が…

「そんな…」

さつきから言葉が出ていない。出でてもほんの一言、それもほとんど意味を成さないことばかり。

「なんで…」

田の前の光景は、実際には私が望んでいたことだったのかもしれない。だけどどこか、信じられない。

ずっと遠くから見ていたので、その2人には気付かれていらないみたいで…さつきと草陰が私の存在を隠してくれているのだと思つ。

見ていけないものを見てしまったような気がして。

そしてセンパイと次会つた時にどうすればいいのか、今から心配してしまつて。

とてもの場にさつきとくることはできなかつた。

まあかそうして立ち去つた直後、公園の出口でセンパイに会つてしまつことになるとは思ひもよらず。

「あっ、センパイ…」  
「ああ、こんばんは」

センパイはそれ以上何も言わない。言いたくないのかもしれない。だけど、私は黙つていることができずに直接聞いてしまつていた。

「ど、どうだつたんですか…？」

「今の僕が一人でいるつてことで察してくれ。それにしても…」

センパイが公園の中の方に田を向けた。

「幸せそうな顔してて、よかつた」

その時、全てを言われなくともよく分かつた。

センパイは、さつき私が田の前たりにした光景を見ていたのだと  
「なんで…」

さつきまでのよつなほんの一言の言葉が、また私の口から出る。  
でも今度は、その後が続いて止められなかつた。

「なんでそんなことされなきやいけないの!…だつてせつかく告白し  
たつていうのに…」

「い、いや、落ち着けって」

センパイが私を止めようと/orする。だけど、それを拒否している私がいる。

自分のため? センパイのため? それさえもわからないほど頭が混乱している。

「落ち着けない! 私の方がずっとセンパイのこと好きなのに!」

私の目に、どんどん涙がたまっていくのがわかった。一緒に今まで押し殺していた感情がむき出しになつていぐ。

「告白されたのなんですが、違う人のところにいけるの? おかしいよ… センパイの気持ちも全然知らないで!」

それはこれまでの我慢の裏返し。こんなことをセンパイに言うのはますます傷を広げることだってわかっていても。でも、言わずにはいられなかつた。

「わかつたから、落ち着け」

センパイの手が、私の頭の上に。

「あ…」

私はその顔を見上げる形になつて… そして、笑顔をくれる。センパイはすごい。じつすると私が何もできないのを知つているのに。

「僕が、そう仕向けたんだ」

でも、センパイの話は私の考えていたこととは違つていて…

言い切つたセンパイのその顔は、どこかすがすがしく、それでいて影を落としているようにも見えた。

「もともと好きな人が別にいるということは知つていたから。できれば応援したいと思つていた。告白したのはフェイクのつもりだつたんだ。だけどな」

私の頭の手の力が、少し強くなつたような気がした。

「本当は好きだったのかもしれないって、今気付いたんだ。だから、彼女が悪いなんて考へないでくれ。全て僕のタイミングが悪かつただけの話」

「でも……」

私がそれでも否定しようとすると、彼の言葉が止まらない。

「ありがとう」

「え……」

「好きだって言つてくれて」

突然顔が痛いとさえ思えるほどに熱くなつてくれる。

そうだ、勢い余つて言つてしまつたことを忘れていた。

でも、センパイがここまで言つてくれたこと。それを受けてる私も逃げることなんて今さらしない。

「そうですよ、まだまだセンパイはモテモテです。その証拠に私がいるんですから」

言つてしまえば、もう照れなんですからなくして。

顔だけでおさまっていたのが、今度は体中が熱くなつていいくのを感じていたけど……

その熱さも、春が近くなつていいくのを感じさせる風が冷ましてくれていた。

もうすぐ春がやつてくる。

私にとつても、センパイにとつても今までの関係と違つた新しい季節。

いつたい、これから私たちの関係はどうなるのだろう……。

それは誰にもわからない、私自身もわからない。  
でもきっと、それはこれからちゃんとおしえてくれる。

そんなことを、センパイの顔を見ながら。風に揺れる木々を見ながら。春の予感を全身で受け止めながら……期待いっぱいに思つ。

だから、私だけでなく全ての恋する女の子に。

春のおとぎ話を、おしゃべり。

## Last Teach 春のおとぎ話、おじさん。（後書き）

おしゃれで。Case : Winterはこれで終了です。

Last Teachは冬の最後にふさわしく、春に向かうメッシュージで締めてみました。

特に最後のあたりは今までのTeach・からTeach・への思いも込めながら。

…自身に向けてのねぎらいもちよつとあったかも。

JRまでの付随企画に頂いた方、どうもありがとうございました。

お詫び：一時、イロハの方に間違えてこの話を投稿してしまってごめんなさい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6903f/>

---

おしえて。～Case:Winter

2010年10月8日15時27分発行